

---

# 魔法少女リリカルなのは ～星に選ばれし者～

syogo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～星に選ばれし者～

### 【Nコード】

N7194K

### 【作者名】

syooigo

### 【あらすじ】

昔、魔法が存在し、魔物や魔王や魔神がいて、それを倒した英雄達がいる。そんな王道といえる物語りを信じる者は少ない。その時代から現代に現われた英雄は悲しき運命を変える為に、今を走り抜ける

## プロローグ（前書き）

オリ主最強系になる予定です。そして処女作になります。暖かく見守ってくれると嬉しいです。

## プロローグ

「……後1つ！いけるな！！」

十歳にもみたい少年が血まみれになりながらも、大きな声で叫ぶ

その手に持つ剣の刀身全体に罅が入っていた。

それに目を向けることもなく、ただ目の前の敵だけを睨みつけ走り出す。

ただ信じるだけ、答えてくれると、

だからこそ剣は主のため、その想いを叶える。

淡い光が刀身を包み、力強く輝きだす

振り上げられた一撃は魔神を切り裂く

断末魔の叫びとともに轟音を立てて倒れた。

少しずつ灰になっただいく様子を見ながら、終わったんだということが頭に浮かんだ。

完全に灰になるまで、気は抜かない。

そんな甘い人生は生きていないから

灰になったのを確認するように、剣は音も立てずに消滅する。

握っていた手を胸に置いてありがとつとつぶやく

「みんな生きてる？」

倒れている仲間たちに向けた言葉は小さな声だが返答があった。

気絶している者もいたが、全員が無事とはいかないが生きていますというのを感じられた。

よかったと思い、これですべてが終わったんだと気を抜いて安心した。

だからこそ油断した。

今、迫り来る脅威に気づくのが遅れた。光がこちらに向けて迫っていた

スピードは遅い、でもただ感じてしまった。助からないと

後ろを向いて寂しそうに笑った後、ゆっくりと前に出る。

「できるならみんなと一緒に生きていきたいかった」

自分だけ助かろうと思えば助かったかもしれないが、それが出来ないからこそ自らが犠牲になる道を選んだ。

最後の力を振り絞り、想いと共に右腕の刻印は輝く

「

」

光は無常にも言葉ごと少年を飲み込みこんだ。

光はより強く発光し、部屋全体を包んだ。

残された仲間の一人が、薄れいく意識の中でこんな言葉が聞こえた気がした。

・・・大丈夫、みんな

は守るから・・・

## ブログ（後書き）

いろいろな人が書いているのを見て、自分も書いて見ようと思いました。のんびりと書いていきますので、気長に待っていてくれると嬉しいです。誤字脱字、おかしいところがあったら教えてください

## 第1話 はじまり

閃光が走る

朝の鍛錬が終わり、家に向かっていたところに、突然それは起きた。即座に対応できたのは、ボディガードとして生きた時間によるなのだろう。

息子達もそれに、気づいてやってくる。

光が消えるとそこには、血に塗れた子供が立っていた。

ゆれたかと思うとそのまま倒れた。

気を失っているらしく、一般人でもない。

光の中から出てきたのだから当たり前だと思う

何より少年が着ている黒いコートに書かれた紋章に見覚えがあった。

昔、混沌に染まった時代、世界を黎明へと導いた集団、彼らはこう名乗った。

S o l a i s  
ソリス

## 第1話 はじまり

頭痛を感じ、目を開けてみると目にしたのは知らない天井だった。

「ここは、どこだ…」

お約束の言葉はどうしたといった幻聴が聞こえた気がしたが気のせいだろう

軋む体を起こし周りを見てみると、特別豪華でもない普通の居間と  
いうことがわかる。

家具がほとんどない状態をみるとここはあまり使われていない部屋  
なんだと想像できる。

なけなしの魔力を使ったセルフチェック、体の隅々まで調べてわかったことは2つ

出血や魔力欠乏による貧血と倦怠感、それ以外は異常なし

一体ここはどこなのだろうと、考えていたら、

コンコン

と、ドアがノックされる。

やさしそうな男性と女性

「おはよう。俺の名前は高町士郎、君を発見して此処まで連れてきた者だ。隣にるのが妻の桃子、それで君の名前は？」

士郎さんは自分が起きたのを気づけるほどの実力者であることには違いない。やさしそうな雰囲気とともにどこか逆らえない力のようなものを感じる。

あれは自分に余計なことを教えている義兄にいさんに対して黒い笑顔を浮かべる義姉ねえさんのような気配・・・

「桐谷翔です」

思い出したくもない記憶を抑えてつけて、簡潔に名前で葉を話す。

名前を話したただけなのに、少しだけ顔が曇ったことに疑問を感じた。

「それじゃあ聞かせてくれるかな？ 君が如何いう存在なのかを」

「……信じられにくい話ですが……宜しいですか？」

通信設備が整っていないかった時代で、魔導師達が念話で話し合うのが主な手段だったあの頃に、

自分のような子どもが戦場の最前線で戦っているという事は知られていても、それが自分だなんて誰も信じてもらえないだろう。

そう思つての言葉だった。

「可能性の一つだとすれば君は、その昔に存在した『ソラス』の一員でもしかしたら魔法使いだと言われても信じるよ」

桃子さんが魔法使いだったら素敵ねといったが、そんなことを気にして入られなかった。

「昔に……存在した？」

信じられない言葉が聞こえた。昔にってことは今は自分の生まれて時代ではなくて、ここは未来だということなる。

死者蘇生はできる。条件際整えれば若返ることのできる魔法もある。

空間転移ならともかく、時空間転移なんてありえない

そんな自分の様子を見て、確信を持った土郎さんが話し続ける。

「2000年前世界を救った集団『ソラス』は魔神を打ち滅ぼした数年後解散して、魔法を悪用させないために自分の子達にも魔法を教

えなかつたために140年前に魔法が滅んだ。」

理解できなかった、したくもなかった。震えが止まらない

自分はひどい顔をしているのだろう。土郎さんが申し訳なさそうに話していた。

だから、きつと真実なのだろうと気づいた。だからこそ誠意をもつて答えることにした。

「『Solais』<sup>ソライス</sup>総隊長、桐谷翔です……といつても、暴走しがちな隊長達……義兄<sup>にい</sup>さんや義姉<sup>ねえ</sup>さんを宥<sup>なぐさ</sup>めているうちにそういう風と呼ばれるようになったただけなんですけどね」

基本的に民主主義ですからと茶化すように話し始めても、溢れてくる出てくる涙は止まらない

「親に捨てられ、悪魔の子だ化け物だと言われてもそれでも、戦う以外に生きる道がなかった自分に手を差し伸べてくれた義兄、義姉と共に世界を救う道を選んだ、ただの子どもです。」

俯いて布団をつかむ自分に桃子さんは優しく抱きしめて、涙を流しながら言った。

「辛かったわね……悲しかったわね……翔君の気持ちは全部理解できないけど、もう良いのよ？ 彼方は泣いて良いのよ。」

その温もりはとても暖かくて、何より哀しかった。

「本当は世界平和なんてどうでもよかつた！……ただ……ただ

！義兄<sup>にい</sup>さんと義姉<sup>ねえ</sup>さんと一緒に生きていきたかっただけなのに・・・  
なんで！！」

抑え付けていた想いが溢れだした。

Side 士郎

十分ぐらいだろうか、翔君も桃子も落ち着き。俺は翔君に聞く

「それで・・・これから如何する積もりだい？」

「生きる意味や理由は、もうないです。何を想って生きていけばいいのかな？」

それまで使っていた敬語は少し身を潜めている。これが翔君本来の喋り方なんだろう

「だった家の子に成らない？」

唐突なまでの桃子の言葉、自分も同じことを言うつもりでいたので、

問題はない

「・・・迷惑になりませんか？」

遠慮をしている訳ではなく、それでかまわないという感じなのだから

「迷惑なんかじゃないわ、寧ろ有難い事よ？　ね、あなた」

「その通りだ。もう一人位子供が欲しかったしな。」

「では桐谷翔という名前はこの時代には目立ちすぎますね。これからは高町と名乗ったほうがいいですね。」

従兄弟といった設定のほうがいかもしれませんねーと言っている翔君に向けてやさしく話す

「生きていく意味や理由ならこれからゆっくり探すといい、時間はたくさんあるんだから」

色々話し合ってから、なのは達に翔君を紹介するのは明日にとした

「一つだけ聞かせてほしいことが・・・世界は平和になりましたか？」

不安そうに尋ねてきたその言葉にやさしく笑って答えた。

「君が生まれたあの時代から比べれば今は、平和なんだろうね」

それはよかったとうれしそうに笑ったその顔が年相応でとてもかわ

いらしかった。

## 第1話 はじまり（後書き）

2話目ができました。徐々に明るくしていこうと思います。かなり変だな〜と思うところがあるかもしれませんが全力で見逃してください。

色々考えた結果、設定は無印の1年前からのスタートでとらハ3スタートになります。

今年中に無印に入るのが目標です。気長に待ってください  
いつかこの主人公のオリジナルの話が書ければいいな〜思っています。

## 第2話 日常

「今日から一緒に暮らすことになった翔君だ。」

「これからお世話になる翔です。よろしく願います。」

だから自分らしい笑顔で話す

「私は高町なのは。なのはって呼んでね」

同じように笑顔で自己紹介してくれた女の子・・・なのは見て感じたことは

この子は、自分と同じように寂しさを胸に抑え込んでいる。

## 第2話 日常

AM 6:00

一緒に暮らし始めて2週間

起床っていうよりは、このくらいの時間になるとあきらめて起きるようになっている。

寝ること自体は好きなので2度寝できるのなら寝ているのだが、高町家の朝は早い

家から少し離れているとはいえ道場であれだけの闘気と気迫で修練しているのなら寝ることも難しい

それでも最初の誰かが起きただけでも目を覚ましていた頃に比べれば、遅くなったほうだ。

それでも早いのでまだ寝ててもいいのよと桃子さんに言われたくらいだしね

自分の紹介や家族になるっていうことは想像以上にあっさりとしたものだった。

なのはには名前で呼んでと言われたけど、恭也さんは諦めたようにため息を吐いただけだったし

こんなに軽くていいのかなと思ったくらいだし

全てを話していないとはいえ受け入れてくれただけでもうれしかった。

朝起きておはようと挨拶することも

母親が朝ごはんを作る光景を見るのも、

それは当たり前ともいえる物でさえうれしいと感じるのは

家庭というものに飢えているからなんだなっと思って思う。

義兄<sup>にい</sup>さんや義姉<sup>ねえ</sup>さんはたくさんいたんだけどね。

やっぱり母や父ではなかったということかな・・・

こんなことをなのはがない時に話したら美由紀さんと桃子さんには抱きしめられ、土郎さんと恭也さんには、とても心配された。

何でだろう？

ちよつど起きてきたのはは、この状況ににどうすればいいのか悩んでたね

「桃子さん、おはようございます」

台所で朝食を作っている桃子さんに声をかける

「翔君、おはよう」

笑顔で応えてくれる桃子さん

この笑顔が好きだったりする

「では行つてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

桃子さんに見送られ、新しく朝の日課になったジョギングに行つてきます。

玄関の扉を出てから、目を閉じて深呼吸

澄んだ空気、香る潮風、きれいな町並み、鳥たちの歌声

昔になかった物がここにたくさんある。

だから未来が好きになる理由になった。

走る距離は20キロ、1時間で走りきるように調節して走る。

この程度の距離とスピードなら汗もかかない

魔力を使って走れば1時間で100キロくらいは走れる自分からすれば

この程度なら歩いているのと変わらない

うちに帰るとなのはが起きてくる

朝おきたたてで寝ぼけてふらふらしているのはをリビングルームに着いたのを確認した後で

道場に行つて3人を呼んでくる。

みんなそろってから朝食を食べ始める。

これが今日までの流れだった。

「学校ですか？」

朝食を食べながらの会話、言われたことについて考えてみる。

「翔君くらいの年だと義務教育で学校に通わなければならないのよ」「そんなんですか・・・と応えながらも考える。

「それで、なのはと同じ聖祥に通ってもらおうと思ってね」「変わった服を着ているのはをみながら考える。

「今度の日曜日に聖祥の転入試験を受けに行ってくれない？」

「それは構わないのですが・・・」

疑問に思ったことを聞いてみた。

「学校って何ですか」

なぜか空気が凍りついた。

何か変なことを言ったんだらうか？

Side 士郎

翔君のあまりにもあんまりな一言にみんなが固まっている。

翔君は何か変なことを言っただらうかと悩んでいる様子

時計の針が2週した後気づく

普段の頭の良さをからは創造できないほど、この子には現代の常識がない

2000年前に産まれたとはいえ、それはないだらう

確か6歳で親に捨てられ、戦い始めたという記録がある

実は虐待を受けていたんじゃないのかという説もある

翔君の義姉さん達に教えられたというのは知れているが、

実はそれは、逆光源氏計画だったという説がある。

正直この子がどんな人生を送ってきたのか、くわしく調べてみる必要がある

近い内に小説を買い揃えおこつ

四苦八苦しながらもなんとか教え込む

「はぁ・・・とりあえず行けばいいんですね」

まだはつきりと理解していない翔君を見て、

当たり前前事を伝えるのがここまで難しいことだとは思わなかった。

恭也より遙かに頭が良い翔君なら試験で落ちることはないだろう。

でも面接で落ちる可能性は非常に高い

ここはしっかりと教え込まなければ、

それから毎夜に面接の練習が始まった。

練習の甲斐あって受験は問題なく受かったということを書いておく

## 第2話 日常（後書き）

書いていて思うのはなのは影がうすいな〜と

無印に入るまで書きづらいからこのままでもいいかなと思っていました。

2話目を書いていて本当はアリサとすずかに出会うまでを書くつもりでいました。

無駄にだらだら書きすぎたせいでバランスが悪くなり（土郎サイドになるまでが前半部分でした）いろいろと諦めました。

書き直すのがもったいなくったというのが本音です。

こんな調子で書いていきます。

気長にやさしく見守ってください

### 第3話 出会い

最近よく考えることがある。

僕って変な子なんだろうか？

何を言っているのかわからないと思うけど自分が一番わかってない疑問に思っただけで聞いてみたのはいいのだけど、何故かみんな驚きすぎて固まっている。

そんなに変なこと言ったのかな？

学校発言から高町家全員からの教育が始まりました。

そんなにダメダメだったんでしょうか？

翔は頭がいいねって言われてきたから、てっきり良いものだと思っていたのに

身内鼻唄だったのでしょうか？

いろんな国の言葉は文字書けたり、話せたりできるのに

地理や歴史もその場所に行ってまで教えてくれたのに

とっても残念です。

天国にいたらいいな〜と思う義兄<sup>にい</sup>さん、義姉<sup>ねえ</sup>さん

翔は頑張ります！見守っていてください！！

鞆を手に校門を歩いていく

決戦は今日、挑むは編入試験

いざ参らん

その後姿をみた用務員さんは後にこう語る

戦場に立つ武士のようだったと語る

3話 出会い

聖祥の入学が正式に決定した。

試験は簡単でした。何であんなに教えられたのだろうか？

不思議です。

「翔君、明日暇かな？」

夕食を食べながらの会話、隣に座っているのはが話しかけてくる。

今日は土曜日で明日は日曜日

「基本的には何も予定はないよ」

住まわして貰ってくれている以上お店の手伝いはしているけど、用事があるのならそちらの優先しても構わないと言われてるし、探索も終わってるから問題ない

「友達に翔君のこと話したら紹介してってなったの。」

なのはの友達だから悪い子ではないだろうし問題はないかな

「それで明日いいかな？」

休日だしお店が忙しいんじゃないのかなと思ひ、桃子さんの方を見てみる。やさしい笑顔で頷いてくれたから大丈夫だね

「うん、いいよ。なのはの友達紹介してね」

「うん！」

笑顔で応えてくれたなのはを見ながらいい出会いになるといいなあと思っていた。

次の日

なのはにつれられて、なのはの友達の家に向かっている。

その最中思うことは一人じゃ絶対来れなかっただろうなということバスに乗って近くだといっても、バスがわからないという初歩中の初歩に躓くからだ。

やっぱりダメダメなんだなと思う

道筋に沿って歩いていくと豪邸が建っていた。

「豪邸だね」

正門に立ちながらの一言、宮廷にも入ったこともある自分からすればお金もちなんだな〜くらいしか思わない

「すずかちゃん家ってすごいよね」

そうだね〜といいつつも、そこにあるインターホンを押してみた。

『いらっしゃいませ。申し訳ありませんがお願いします』

二人で名前を言ってみる

『声紋確認中・・・かしこまりました。どうぞお通りください』

と言って、正門がゆっくりと開いてくれた。

「なのは、声紋って指紋の声バージョンってことだよね」

「うん、そうだよ」

「こういうのって前もって登録しておかなかったら駄目なんじゃないの？」

疑問に思いながら、正門を超えた。

その瞬間正門が凄まじい速さで閉じる

「ええええ!!」

なのははとても驚いているけど、この程度で驚けるような幸せな人生は生きていない

「これがハイテクってやつか」

「それちょっと違うよ!」

『迎撃！迎撃！不審者です!』

大量に出てくるロボ、ロボ、ロボこの光景正直懐かしいね。

エーアリヒカイト家に行ったときにエーディリヒ型の初期型に襲われたし

あの家系って天才だけどマッドだったし、いろいろと抜けてたしね。

「なのは、いろんなことにごめん」

「え？」

なのはの運動神経の無さは把握済み、だから足払いをかけて地面に叩きつけられる前に抱きかかえる。

俗に言うお姫様抱っこで

「え！？しょ！翔君！？」

なのはは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしている。

「舌かまないように口閉じてて、大丈夫俺が守るから」

安心させるようにやさしく笑った後に走り出す。

距離は約50メートル、敵は前に30体、左右のその倍

だったらなのはを背負っても障害があつたとしても10秒もかからない

破壊して弁償しろと言われても困る。だったら無破壊で突っ切る

体勢を低くしてから一気に加速した

「ごめんね、登録してない人くるからセキュリティ切らなきゃいけないかったのに」

「さすがにびっくりしたよ」

玄関までなら逃げ切れると思ったけど、難易度があがったりビームが出てきたりするとなのはを抱えながら、魔法を使わずにどうにかできるわけがなく、全力で逃げ回ることしかできなかった。

・・・まあ、弁償とかがあければ破壊しつくしたけどね

逃げ回っている最中になのはにこの家の人に電話して止めてもらっただけどね

「あんた、すごいわね。なのはを抱え・・・お姫様抱っこしながら逃げるなんて」

「やあー。と叫びながら、手を振っているのは、照れ隠しだね。」

そして、わざわざ言い直してなのはをからかうなんて・・・とつてもいい性格だねw

「自己紹介が遅れたね、高町翔。よろしく」

「私の名前は月村すずか。すずかと呼んでね、よろしくね、翔君」

「私はアリサ・バニングスよ。アリサでいいわよ、私も翔って呼ぶから」

アリサにすずかか・・・仲良くなればいいな

「こんなところで話すのもなんだから部屋に行こう。案内するね」  
先導するすずかに着いていきながら、そばにいるメイドを見て考える。

自動人形だね。とするとすずかでもしかして夜の一族

「あ、あのっ、翔君」

すずかに案内されている途中に袖を引つ張りながら声をかけてくる

「そ、そのっ・・・あ、ありがとう」

なのはは、顔を赤くしながらお礼を言ってきた。

「いえいえ、どういたしまして」

少し照れながら話すのを見て、ただ自分は笑顔で返す



### 第3話 出会い（後書き）

遅くなってしまいました。でも1ヶ月過ぎなくてよかったと思っているところですよ。

まあゲームばかりしてた自分が悪いだけです。すみません  
次はあんまり遅くならないように気をつければいいなあ〜と願っています。

誤字脱字などありましたら教えてください。感想も待っています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7194k/>

---

魔法少女リリカルなのは ～星に選ばれし者～

2010年10月14日16時27分発行